

Title	<書評>Roger T. Ames (ed.), 'Philosophy East and West. Volume 63, Number 3', University of Hawai'i Press, 2013.
Author(s)	白川, 晋太郎
Citation	京都大学文学部哲学研究室紀要 : PROSPECTUS (2013), 16: 26-31
Issue Date	2013
URL	http://hdl.handle.net/2433/192336
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

書評

Roger T. Ames (ed.)

Philosophy East and West. Volume 63, Number 3.

University Hawai'i Press, 2013.

白川晋太郎

1. 仏教と矛盾

真矛盾主義 (dialetheism) とは、真なる矛盾が存在すると主張する立場である。すべての矛盾とは言わないまでも、いくつかの矛盾は解消することができず、真なるものとして受け入れなければならないと考える。雑誌『東西哲学 (*Philosophy East and West*) 』(2008) に含まれる論文「真矛盾主義者の方法：仏教における矛盾 (The Way of the Dialetheist: Contradiction in Buddhism)」において、出口康夫、ジェイ・ガーフィールド、グレアム・プリーストの三氏からなるチーム（以降それぞれの頭文字を取って DGP と呼ぼう）は、中観派や禅など様々な仏教思想を真矛盾主義の立場から解釈している。仏典にみられる矛盾的表现はふつうメタファーであるとか、方便 (upāya) のためのものであるとか、真諦や俗諦といったパラメータを導入することで解消可能と考えられているが、DGP によれば、そのようなやり方では理解できず解消できない矛盾が存在し、それらは文字通り真なる矛盾を意味するものとして受け入れなければならないのである。

今回取り上げる雑誌『東西哲学』(2013) には、真矛盾主義者 DGP への様々な応答——道元、天台宗、中観派などのテキストを根拠に文献学的に DGP を批判するもの（田中、ツイポリン、シデリッツ）、現代の可能世界論の枠組みを用いて DGP の主張を真矛盾主義者以外にも理解可能にしようとする試み（八木沢）など——と、その一つ一つに対する DGP からの再応答が含まれている。

私は以前『月を指さす (*Pointing at the Moon*) 』(2009) の書評において、トム・ティルマンズの論文「中観派はどのように考えるのか? (How do Mādhyamikas Think?)」を取り上げ、彼が主張する「弱い真矛盾主義」の考えを紹介した⁽¹⁾。本雑誌には、ティルマンズ自身がその論文を再検討した「「中観派はどのように考えるのか?」再考 (“How Do Mādhyamikas Think?” Revisited)」⁽²⁾と、ティルマンズの一連の議論に対する DGP の応答「われわれが考えるところの中観派の考え (How We Think Mādhyamikas Think)」⁽³⁾が含まれている。そもそもティルマンズの「中観派はどのように考えるのか?」は、ガーフィ

ールドとブリーストの論文「ナーガールジュナと思考の限界 (Nāgārjuna and the Limits of Thought)」⁽⁴⁾ への応答であったことを考えれば、これまで DGP とティルマンズのあいだにはいくつもの議論の応酬があったことになる。この書評ではティルマンズと DGP の応答を集中的に取り上げることによって、伝統的な仏教思想を現代哲学の知見も含めた見地から解釈しようというこうした分野の議論の仕方というものを少し眺めてみたい。

2. ティルマンズの「『中観派はどのように考えるのか?』再考」

ティルマンズはこの論文においても彼の基本的な立場である「弱い」真矛盾主義——ある命題 p について、 p と $\neg p$ を受け入れるものの、その連言 $p \wedge \neg p$ は受け入れない立場（連言 $p \wedge \neg p$ を受け入れるのが「強い」真矛盾主義である）——は保持したままだが、弱い真矛盾主義を擁護するための文献学的根拠や、その立場を取ることの帰結について述べている。

ところで DGP が真であると考える矛盾は次の三つであった。

- ① 存在論的矛盾：すべてのものは自性を持たないという自性を持つ
- ② 意味論的矛盾：究極的な真理は存在しないが、すべては空であるというは究極的な真理である
- ③ 表現可能性の矛盾：究極的な実在や究極的な真理は語りえないとされるが、なぜそうなのかを語ることによって究極的な実在や究極的な真理について語っている

ティルマンズによれば、インドやチベットの仏教の伝統においては、これら三つの矛盾は真正な矛盾であるとはみなされておらず、それぞれ無害化する方法が考案されてきた。簡単に述べれば、ツォンカパ (Tsongkhapa) に始まるゲルク派 (dGe lugs) は、自性 (svabhāva) には二つの意味があるということを示し、存在論的矛盾を解消しようとした。また同じくゲルク派は、究極的な真理と究極的な存在を区別することによって意味論的矛盾を解消しようとした（究極的な真理はあるのだが、究極的な真理を含めいかなるものも究極的には存在しない）。さらにダルマキールティのアポハー理論における「写像的な言語」と「因果的に事物とつながっている言語」の区別によって、表現不可能性の矛盾が解消できるとされる（アポハー理論においては、前者の言語は不可能でありそれゆえ表現不可能性が説明され、後者によっていかに言語が機能しているかが示される）。このように三つの矛盾はインドやチベットの思想家によって解消されてきたのであるから、DGP に残されている道は仏教のテキスト内の矛盾らしきものが解消されえないと主張することではなく、 $p \wedge \neg p$ という形

の矛盾を許容するものとしてテキストを解釈することによって、現代の真矛盾主義者にとってだけではなく、仏教の哲学体系においてどのような利益があるかを示すことであるとティルマンズは言う。しかし彼によれば強い真矛盾主義を取ってもそうした利益はない。一方、弱い真矛盾主義解釈には、ナーガールジュナや般若經典にとって本質的な懷疑論的静寂主義 (quietism) ——あらゆる信念の保留——を理解することができるという利益がある。DGP が言うように、 $p \wedge \neg p$ という連言を究極的真理として受け入れれば、(矛盾的な) 実在について明確な立場を取ることであり、特定の立場を取らないというナーガールジュナの思想を理解していないことになる。弱い真矛盾主義者は(何らかの理由によって) 以前に主張したことを(他の理由によって) 否定し、それぞれの主張は互いを弱め、それぞれを完全に信じることはなくなる。それぞれの主張が実在を捉えているとは信じなくなり、結局、いかなる特定の立場も取らなくなるというわけである。

ティルマンズは弱い真矛盾主義や静寂主義を取るためには、「取り消しとしての否定 (cancellation view of negation)」—— $\neg p$ と主張することは、 p という主張を単に取り消すだけでそれ以上の情報を何も付け加えないという否定に関する考え方——を取らなければならないことを指摘し、こうした否定は文献学的にも支持されると考える。たとえばサンスクリット語においては、 p の否定は、 p の信念を「止め」、「破壊し」、「無効化する」といった意味があり⁶⁾、インドやチベットの中観派においては純粹に無効化の働きをする否定が認められるのである。

3. DGP の応答

DGP のティルマンズへの応答は四つの点からなされている。

(1) 弱い真矛盾主義について：DGP によれば、仮に中観派のテキストにどのような形であれ矛盾が認められるのなら、たとえテキストにはっきりとそう書いていなくても、 $p \wedge \neg p$ という連言の意味で解釈しなければならない。その理由は第一に現代の英語と同様にサンスクリット語やチベット語において、それらを母国語にする者は、 p 、 q という連続した主張と、 p かつ q という一つの主張を区別することはないからである。さらに弱い真矛盾主義は「アジャンクション (adjunction) の原理： $p, q \vdash p \wedge q$ 」を拒否するのだが、これは一般的に言って非常に珍しい考え方で、インドの論理学者がこの原理を拒否した論理学を採用している証拠がないし、ティルマンズも提示していない。

(2) 体系的な利益について：ティルマンズは強い真矛盾主義をとっても体系的な利益はないと考えるが、DGP はいくつかの矛盾的表現を真なる矛盾であると解釈できるということこそがその利益であると考え。いくつかの矛盾は気まぐれに出てきたのでも、悟りの

ための方便でもなく、仏教（少なくとも中観派）の核心なのである。ティルマンズの示すような巧みな方法によってそれらを整合的に理解するようにできるかもしれないが、そうすることによって仏教の独創的な洞察は骨抜きにされてしまうのである。

（３）仏典の矛盾表現について：ティルマンズがしなければならないことは、仏典における矛盾的表現が本当に無害化されていることを示すことである。ティルマンズは、存在論的、意味論的、表現可能性に関する三つの矛盾的表現は解消されると言うが、単に矛盾を無害化することを試みたり、無害化したと確信したりするだけでは、実際に解消したことにはならない。存在論的矛盾に対してティルマンズは自性という概念は多くの仕方では理解されるということを指摘したが、そのような概念の曖昧性がパラドックスを解くことはない。意味論的矛盾に対して、究極的真理と究極的実在（存在）を区別し、究極的実在が存在しないことが究極的真理であると解釈することで、「究極的真理が存在しないということが究極的真理である」というシデリッツの有名なスローガンは無害化することはできるかもしれないが、そのような区別をしても意味論的矛盾は成立してしまうと DGP は主張する。表現可能性の矛盾に対してティルマンズは実在を写像する言語という考え方を放棄し、因果説のような言語観を取ることによって問題は解消すると言うがこれは的を外している。もし何かが語りえないのならそれについて語ることはできないのであり、言語がどのように働いているかは関係ない。言語がどのような働きをしようとも、それは慣習的なものを構成するのであって、究極的なものはそれを越えて出ているのである。

（４）否定について：先ほど述べたように、ティルマンズの解釈が成り立つためには、取り消しとしての否定という考え方を採用する必要がある。DGP が問題にするのはこうした否定と弱い真矛盾主義の関係である。この否定では、連言 $p \wedge \neg p$ において、前者は後者を取り消し、後者は前者を取り消しているで自分自身を取り消していることになり、 $p \wedge \neg p$ は内容を持たず、 p や $\neg p$ を含めて何も含意しない。ティルマンズが認めるような形で p と $\neg p$ を別々に主張したとしても、互いに打ち消し合って何も内容を持たないことになり、それでは弱い真矛盾主義さえも取れなくなるのではないか。この懸念に応えるためには、 p と $\neg p$ の連言を主張することと別々に主張することの違いを説明しなければならないのだが、ティルマンズはこの違いを説明しないのである。

4. 静寂主義と真矛盾主義

これまでに明らかになった両者の対立点をまとめよう。

ティルマンズは弱い真矛盾主義を取り、ナーガールジュナを静寂主義者として解釈し、三つの矛盾はこれまでの伝統において解消されていると主張する。他方 DGP は強い真矛

盾主義を取り、ナーガールジュナは真なる矛盾を是認していると解釈し、三つの矛盾はいずれも解消されていないと主張する。何回かの議論のやり取りによって、両者の根本的な対立点がはっきりしたが、さらに弱い真矛盾主義と静寂主義との間に緊張関係があることも明らかになったように思われる。つまり否定についての DGP の検討は、ティルマンズに立場の変更を迫るものであると思われるのである。

取り消しとしての否定では、 $\neg p$ は単純に p を取り消すのであるから、 $p \wedge \neg p$ は何も表現せず導かないのだった。ところでティルマンズの念頭にある静寂主義とは、判断の保留を意味するものであり、 p 、 $\neg p$ 、 $p \wedge \neg p$ といった立場を取らず、いずれにも執着しないというものだったから、取り消しとしての否定は静寂主義と非常に相性が良いことがわかる。 $\neg p$ という主張は、積極的なことを主張し何らかの立場を取るのではなく、単に先の主張 p を取り消すのであるから、どちらの主張にもコミットしないことになるからである（これはみずから主張を立てないというナーガールジュナ自身の中観派の特徴づけとも整合的である⁶⁾）。

問題は弱い真矛盾主義である。これは p を受け入れ、 $\neg p$ も受け入れるにもかかわらず、 $p \wedge \neg p$ は受け入れないというものだったことからわかるように、弱い真矛盾主義にとって重要なことは、何らかの主張を「受け入れる (accept)」ということである。否定を取り消しとみなし、静寂主義を取るのならば、そもそも「受け入れる」必要はなく、むしろ一時的にでもあれ受け入れてしまうのは不都合なのではないか。ティルマンズの主張を整合的に貫こうとするならば、むしろ弱いものであれ真矛盾主義を取らないほうが良いように思え、なぜティルマンズは静寂主義を取りつつ、あえて弱い真矛盾主義をも取るのかということが疑問になる。このように静寂主義と真矛盾主義の緊張関係が明らかになったことが、ティルマンズと DGP のやり取りの意義の一つであると思われる。

5. 今後求められるもの

以上のやりとりを含め雑誌全体を通して明らかになったことは、DGP は、真矛盾主義に対する批判はもちろんティルマンズ（や八木沢）のような弱めた形の真矛盾主義ないし歩み寄り⁷⁾をも受け付けず、彼らの言う意味での真矛盾主義——この世界で $p \wedge \neg p$ という形の真なる矛盾が存在する——を受け入れるかどうかをわれわれに迫ってくるということである。DGP が真矛盾主義の根拠としてこれまでに提示してきたものは、第一に現代の論理学において矛盾許容論理 (paraconsistent logic) が発展していることである。それに加え矛盾的表現に満ちた仏典を文字通りに解釈することによって先にみたような存在論的矛盾を導き、その立場を補強しようとするのである。ここで気がつくのは、これまでの議論に

は認識論的な話が欠けているということであり、このことが多くの者にとって真矛盾主義を受け入れにくくしている一因であるように思える。矛盾を適切に扱うことができる論理があり、さらに真なる矛盾が存在していると主張されても、われわれは矛盾をどのように認識できるのか（できないのか）、あるいはそもそもこのような段階では主体が矛盾という対象を認識するといった一般的な図式は成り立たなくなるといった類の説明がなされない限り、やはり真矛盾主義に対して態度を決めかねるところが残る。ここで仮に真なる矛盾に対するわれわれの認識様態が神秘的直観の類であるとするのは、少なくとも DGP にとっては問題である。なぜなら彼らの主要な目的の一つは、仏典に矛盾が登場することは、仏教が非合理的な神秘主義であることを示しているのではなく、むしろ合理的であるがゆえの帰結であると主張することだからである⁽⁸⁾。仏教思想から神秘主義を排除しようとする以上、真矛盾主義の認識論的側面に関しても何らかの合理的な説明が求められるだろう。

註

- (1) 白川 (2011).
- (2) pp. 417 - 425.
- (3) pp.426 - 435.
- (4) In Priest (2002).
- (5) サンスクリット語は、pratiśedha (blocking), niśedha (stopping), bādhā (annuling), kṣati (destroying). (Tillemans, 2013, p.421).
- (6) 「もしもわたくしに何らかの主張があるならば、しからば、まさにそのゆえに、わたくしには理論的欠陥が存することになるであろう。しかるにわたくしには主張が存在しない。まさにそのゆえに、わたくしには理論的欠陥が存在しない」（『異論の排斥』）（中村, 2002, 129 頁参照）。
- (7) 今回は詳しく取り上げなかったが、八木沢は現実世界とは論理法則が異なる不可能世界が現実世界と同じ意味で実在し、その世界において矛盾が真であるとするので、DGP の主張を真矛盾主義者以外にも理解可能なものにしようとしている(Yagisawa, 'The Way of the Modal Realist: Dialetheism and Buddhist Philosophy', pp.359 - 369)。だが GDP は、仏教にとって本質的なのは「この現実世界」において真なる矛盾が存在することであるとし、八木沢の提案を拒否する(pp. 370-372)。
- (8) Deguchi, Garfield, and Priest(2008). 'The Way of the Dialetheist: Contradiction in Buddhism' in Ames(2008). pp.395-402.

文献

- Ames, R. T.(ed.) (2008). *Philosophy East and West*. Honolulu: University Hawaii Press. Vol. 58, No. 3.
 —— (2013). *Philosophy East and West*. Honolulu: University Hawaii Press. Vol.63, No. 3.
 D'Amato, M., Garfield, J.L. & Tillemans, T.J.F. (Eds.) (2009). *Pointing at the Moon: Buddhism, Logic, Analytic Philosophy*. New York: Oxford University Press.
 中村元 (2002). 『龍樹』, 講談社.
 Priest, G. (2002). *Beyond the Limits of Thought*. New York: Oxford University Press.
 Priest, G & Garfield, J. L. (2002). 'Nāgārjuna and the limits of thought', in Priest (2002).
 白川晋太郎 (2011). 「[書評] Mario D'Amato, Jay L. Garfield & Tom J. F. Tillemans (Eds.), *Pointing at the Moon: Buddhism, Logic, Analytic Philosophy*. Oxford University Press, 2009.」, 『PROSPECTUS』, 京都大学哲学研究室, 14 号, pp.96-100.